

平成22年度資源評価票(ダイジェスト版)

マチ類

アオダイ *Paracaesio caerulea*

ヒメダイ *Pristipomoides sieboldii*

オオヒメ *Pristipomoides filamentosus*

ハマダイ *Etelis coruscans*

系群名 奄美諸島・沖縄諸島・先島諸島

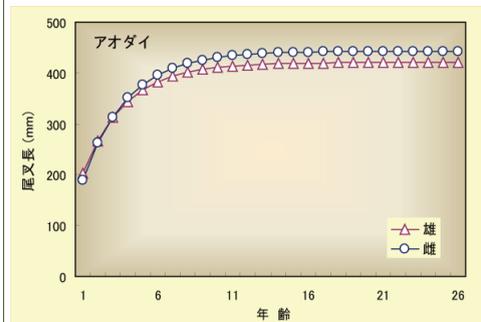
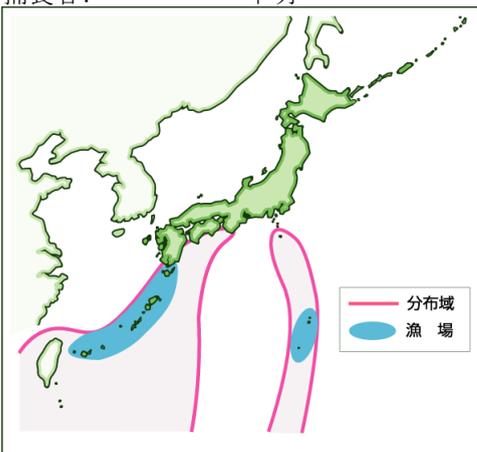
担当水研 西海区水産研究所



写真はアオダイ

生物学的特性

寿命:	不明
成熟開始年齢:	アオダイは4歳(50%)、6歳(100%)、ヒメダイは3歳(50%)、5歳(100%)、オオヒメは3歳(50%)、5歳(100%)、ハマダイは13歳(50%)、19歳以上(100%)
産卵期・産卵場:	アオダイは4~8月、ヒメダイ、オオヒメは5~7月(盛期)、ハマダイは4~11月
索餌期・索餌場:	不明
食性:	アオダイは大型の動物性プランクトン、ヒメダイとオオヒメは魚類やカリボヤなど、ハマダイはイカや魚類
捕食者:	不明

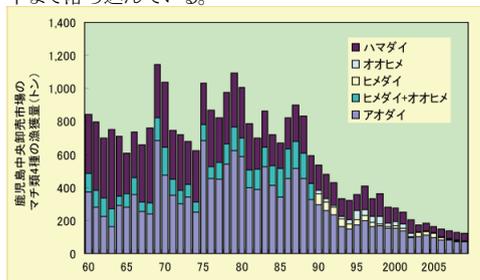


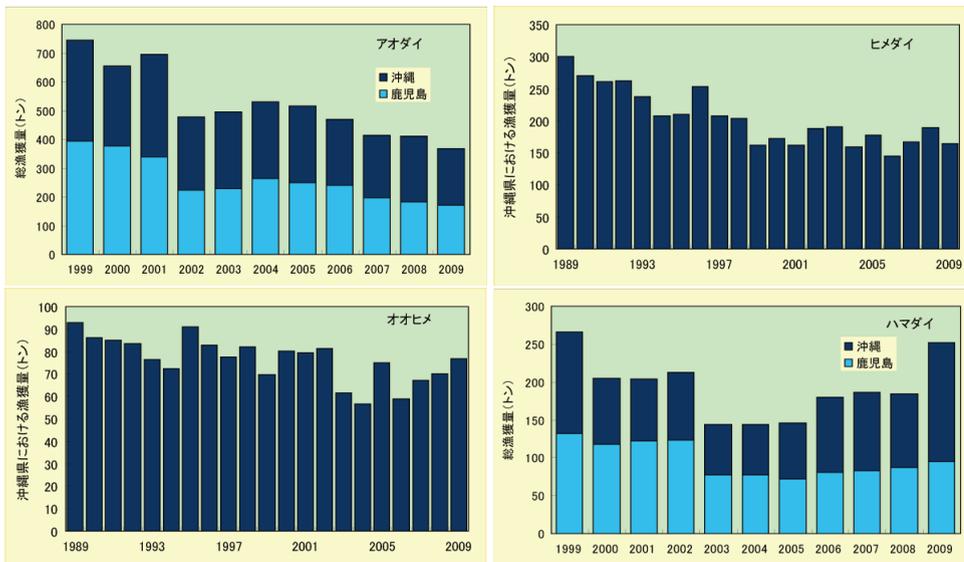
漁業の特徴

水深100m以深の深海底魚一本釣りによる漁獲が多いが、延縄でも漁獲される。周年操業する漁業者が多いが、ソデイカ漁(漁期11~4月)との兼業も行われている。1航海当たりの操業日数は5トン未満の小型船で日帰りまたは2~3日、5トン以上の船で1週間程度。

漁獲の動向

鹿児島中央卸売市場のマチ類4種合計の水揚げ量では、1988年まではおよそ800トン前後で増減を繰り返しながらほぼ横ばい状態で推移していたが、1989年以降急激な減少に転じ、2009年には1969年の最高値1,145トンのおよそ1/10の122トンまで減少した。近年10年でも緩やかな減少傾向が続いており、2009年の水揚げ量は2000年の半分以下まで落ち込んでいる。



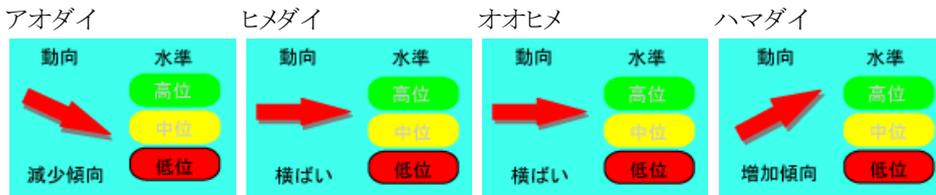
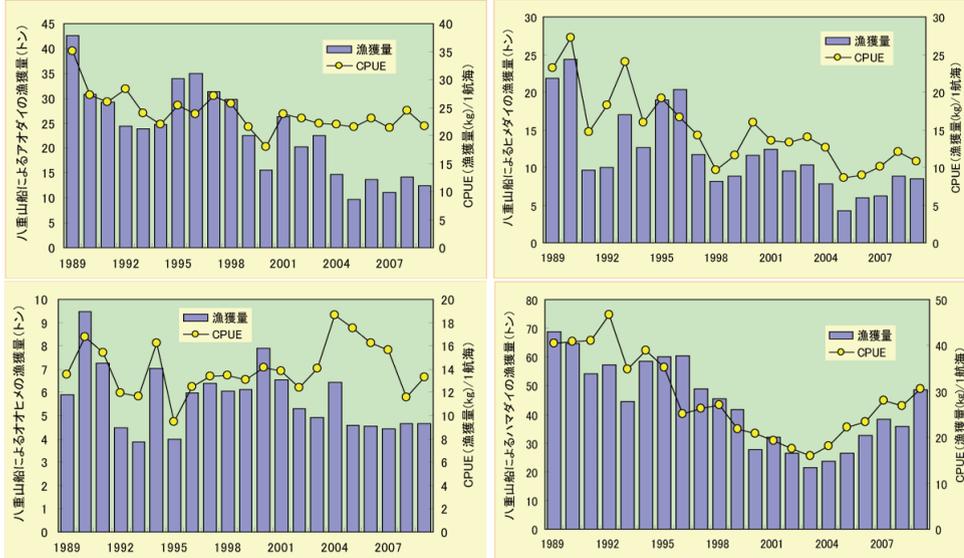


資源評価法

鹿児島県・沖縄県の主要港に水揚げされるマチ類の漁獲統計による魚種別漁獲量全体の経年変動の傾向を検討した。また、沖縄県に水揚げされるマチ類のうち、県漁連に水揚げする大型標本船13隻および八重山漁協所属のマチ類船全体の漁獲量と漁獲努力量の情報を収集し、過去21年間の傾向を検討した。また各種の年齢別漁獲尾数を推定し、それらを用いてCPUEの相乗平均でチューニングしたコホート計算を試行し、資源の動向の参考とした。

資源状態

マチ類全体の漁獲量は過去50年の間に大幅に減少していることより、資源水準は低位と判断する。アオダイにおいては鹿児島県、沖縄県ともに近年の漁獲量は減少傾向にあり、試算した資源量も減少傾向にあることより動向は減少と判断した。ヒメダイの沖縄海域での漁獲量は横ばいであること、資源量は増加傾向にあるが2009年のCPUEが減少していることから、動向は横ばいと判断した。オオヒメに関しては沖縄県の漁獲量は増加傾向にあるがCPUEの相乗平均は近年漸減・漸増を繰り返しながらほぼ横ばいであることから動向は横ばいと判断した。ハマダイは漁獲量・CPUE共に増加傾向であり、さらに試算した資源量も近年増加傾向で推移していることから動向は増加と判断した。



管理方策

漁獲量の推移が資源状態を反映すると仮定すると、1980年代以降マチ類全体の漁獲量が急激に減少していることから、マチ類資源の水準は極めて低位であると判断され、早急に資源回復をはかる必要がある。第1期資源回復計画の結果、保護区内では漁獲尾数の増加、体長・体重の増大等、一定の効果が現れはじめているものの、海域全体の資源量に反映されるには至っていない。2010年度より開始された第2期資源回復計画では第1期より保護区を拡大し、現在22区の周年または季節的な保護区を設置している。また第2期資源回復計画では保護区に加え漁獲サイズ規制なども開始し、保護区内のみならず、海域全体の漁獲圧を下げる方向で実施されている。

資源評価のまとめ

- マチ類4種の資源状態は低位水準、動向はアオダイは減少傾向、ヒメダイ・オオヒメは横ばい、ハマダイは増加傾向
- アオダイの総漁獲量は近年5年で150トン減少
- ハマダイの資源量全体は増加傾向にあるが親魚量は激減している

管理方策のまとめ

- 資源水準の回復のためには漁獲努力量の削減が必要
- 2010年4月より第2期資源回復計画が公表された
- 第2期資源回復計画では保護区を18区から22区に拡大した
- 保護区以外の漁獲圧も下げるため体長規制も実施している

資源評価は毎年更新されます。